

『資本論』のエコロジーから考える マルクスとエンゲルスの知的関係

斎藤幸平

日本学術振興会海外特別研究員／カリフォルニア大学サンタバーバラ校客員研究員

I

はじめに

マルクスの思想は「生産力至上主義」であり、環境思想とは相容れないという批判は長いこと大きな影響力を持ってきた。だが、グローバル資本主義の展開とともに環境問題が深刻化するなかで、近年ではむしろ「マルクスのエコロジー」が着目されるようになっていく(Burkett[1999]; 岩佐・佐々木[2016]; Saito[2016])。とりわけ英語圏では様々な「エコ社会主義者」たちが『資本論』に由来する「物質代謝の亀裂」(metabolic rift)という概念を採用し、地球温暖化、自然資源の枯渇、遺伝子組み換えによる生態系の攪乱といった資本主義的生産の否定的側面を論じるようになっていく(Klein[2014]; Longo et al.[2015]; Angus[2016])。その意味で、「エコロジー」というテーマは、日本での紹介は遅れているものの、明確な現代的意義をもつマルクス研究の一領域になっていけると言えるだろう。

とはいえ、あらゆるマルクス研究者が「マルクスのエコロジー」の現代的意義を認めているわけではない。マルクスはあくまでも19世紀の思想家であり、現代のエコロジー危機については有効な理論的枠組みを提示できないという批判は依然として根強い(Tanuro[2010]: 91)。また、いわゆる「西欧マルクス主義」の伝統を引き継ぐ代表的な思想家たちはエコロジーが「新たな大衆の阿片」に過ぎないと皮肉っている(Žižek[2009]: 158)。

このような批判が根強い理由の一つに、「マルクスとエンゲルスの知的関係」という問題がある。ルカーチに端を発する西欧マルクス主義は自然科学をエンゲルスの研究テーマとみなすことで、マルクスの経済学批判を救済しようとした。だが、彼らはマルクスの自然科学研究を無視したために、資本主義批判としてのエコロジーを展開することができないというジレンマに陥っている。そして、この理論的閉塞感のために、一部のエコ社会主義者たちがマルクスに対する批判を強

めているのである。

こうした西欧マルクス主義の一面性を克服すべく、フォスターやバーケットは異なったアプローチを採用した。彼らはマルクスとエンゲルスの間にエコロジー思想に関して重要な異同はないと主張し、両者の自然科学研究に着目することで、「物質代謝の亀裂」の概念を練り上げたのである(Foster and Burkett[2016]: 10)。さらにフォスターはその分析を現代の環境問題へと拡張することで、「マルクスのエコロジー」の現代的意義を積極的に展開している(Foster et al.[2011])。しかしフォスターやバーケットがマルクスは経済学批判の一環として環境問題を捉えようとしていたと唱え、その上でマルクス経済学とエコロジー経済学との対話を試みようとするほど、マルクスとエンゲルスの経済学批判をめぐる理論的な違いから、エコロジーや自然科学研究の領域においても見解の相違が存在するのではないかという疑念が強まってくる。

そこで、以下では先行研究とは異なるアプローチを採用してみたい。つまり、これまで西欧マルクス主義によって無視されてきたマルクスの自然科学との取り組みを『資本論』との関連で検討することによって、エンゲルスとのエコロジーをめぐる差異を考察していく。具体的には、自然科学研究における両者の共通認識や協働を一定程度前提としながらも、フォスターやバーケットが検討していない『マルクス・エンゲルス全集(MEGA)』によってはじめて利用可能になった資料を『資本論』との関連で分析することで、「マルクスのエコロジー」の射程を明らかにしたい^{※1)}。そうすることで、『資本論』という未完のプロジェクトを21世紀にエコロジカルに発展させるための理論的な方向性が浮かび上がってくるだろう。

II

マルクスとエンゲルスの知的分業？

西欧マルクス主義は、ソ連の機械論・経済決定論的

な「弁証法的唯物論」からマルクスを救い出すために、自然科学をエンゲルスの専門領域とみなし、マルクスの経済学批判とは関係のない領域として扱おうとした。事実、プレハーノフのように、人間とは独立した自然そのものに弁証法が存在すると考えるなら、自然の観察によって弁証法的な概念把握が可能であることになり、自然科学の実証主義的な思考がマルクス主義の社会分析へ逆輸入されることになる。そのような事態を深刻視した西欧マルクス主義は、弁証法の適用範囲を社会に限定することでマルクスを機械論的な世界観から救おうとしたのだった。

こうして西欧マルクス主義はマルクスとエンゲルスの知的分業を主張することによって後者をスケープゴートにしたわけだが、皮肉なことに、この知的分業を強調したのはエンゲルス本人であった。マルクスの死後に刊行された『反デューリング論』第二版「序文」のなかでエンゲルスが述べているところによれば、マルクスは「数学に精通した人であったが、様々な自然科学については、われわれは少しずつ、とぎれとぎれに、ばらばらに追究することしかできなかった」。だが、その後エンゲルス自身は、「力に及ぶかぎり」で「数学と自然科学」を研究したと回想している(MEGA I/27: 494)。事実、『反デューリング論』と『自然の弁証法』はエンゲルスが物理学、化学、生物学の領域を詳細に検討したことを記録しており、プレハーノフらの伝統的マルクス主義の世界観構築に大きな影響を与えた。反対に、マルクス自身は、自然科学についてのまとまった著作を残しておらず、自然科学を担当したのはエンゲルスだという見解が普及したのである。

ところが、エンゲルスは『反デューリング論』第二版「序文」のなかで、読者にある重大な隠し事をしている。当時マルクスの遺稿を整理・編集していたエンゲルスは、晩年のマルクスが熱心に自然科学関連の著作を研究し、膨大な抜粋ノートを作成していたことを知っていたにもかかわらず、そのことにはまったく触れずに、マルクスは自分とは違って自然科学を「とぎれとぎれに」、「ばらばらに」しか研究できなかったと述べているにとどまっているのだ。

なるほど、1864年7月の段階では、マルクスはエンゲルスに触発されて、カーペンター『生理学』やシュプルツハイム『脳と神経系統の解剖』などを読み、「僕はいつも君の足跡についていく」とエンゲルスに伝えていた(MEGA III/12: 585)。だが、その後1865/66年にかけて、ドイツの化学者ユストゥス・フォン・リービッヒ著『化学の農

業および生理学への応用』(以下、『農芸化学』)第7版を読んだのを皮切りに自然科学研究に火が付き、1868年以降、その研究対象は化学、地質学、鉱物学、生理学、植物学など多岐に及ぶようになる。とりわけ、今日でいう化石燃料の使用によるエントロピーの増大の問題については、自分よりもマルクスの方が精通していることをエンゲルス自身が認めるほどであった。「労働している人間は、単に現在の太陽熱の固定者であるだけでなく、それよりもずっとはなはだしい過去の太陽熱の浪費者である。エネルギーの貯蔵物である石炭や鉱石や森林などの乱費において我々が何をやっているか、僕よりも君のほうがよく知っている」(MEW 35: 134)。だが、エンゲルスはそうした晩年のマルクスの取り組みには一切触れずに、自らの自然科学研究がマルクスの「発見した」唯物論的弁証法の応用であると宣言したのである。

実際、第二版「序文」には奇妙な点が存在する。エンゲルスは『反デューリング論』の内容がマルクスの認識と完全に一致することを力説し、その証拠として、マルクスに「印刷前に草稿全体を読み上げた」うえで、全面的賛同を得たと主張しているが、そのような「証拠」はマルクスの死後に初めて指摘されるようになったのである(MEGA I/27: 493; Carver[1983]: 123)。エンゲルスは信憑性が疑わしい主張を行ってまで、自らの見解がマルクスと同じものであることを強調した。だが他方で、マルクスが自然科学を熱心に研究していたことを知っていたにもかかわらず、この点には言及していない。普通に考えれば、マルクスが膨大な自然科学抜粋を作成していたという事実は、「自然の弁証法」が二人にとっての共同プロジェクトであったことを証明してくれる最良の証拠ではないだろうか。だが、エンゲルスは「序文」でマルクスの自然科学抜粋の存在に触れようとしなかった。この不自然な沈黙を徴候的に解釈することも可能だろう。マルクスの自然科学研究が自分の自然科学研究とは違う性質のものであるということをエンゲルス本人が認めていたというように。

III

物質代謝論の射程

いずれにせよ、今日ではマルクスとエンゲルスの両者が自然科学を熱心に研究していたという事実が明らかになっている以上、「自然」の領域をエンゲルスに限定することはできない。そうはいつても、フォスターやバー

ケットのように両者の関心が「同じ」であったと主張するのは大きな飛躍があるのであり、問題はより丁寧に検討される必要がある。

実は、弁証法の自然への適応を戒めたルカーチ自身が後に認めたように、マルクス本人は「社会」と「自然」の関係を完全に切り離したりはせず、人間もまた自然の一部としてとらえ、両者を統一的に把握しようとしていた。しかも、ルカーチはその鍵となる概念が「物質代謝」であることを先見的に認識していたが、その「物質代謝の亀裂」こそが今日の「マルクスのエコロジー」にとっての基本概念に他ならない。

『資本論』で「物質代謝」概念は様々な用途で用いられているが、そのなかでもっとも重要なのが「労働過程」論で展開された、労働を人間と自然の物質代謝の媒介とみなす把握である。「労働は、第一に、人間と自然とのあいだの一過程、すなわち人間が自然とその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である」(MEGA II/6: 192)。どのような社会においても、人間は生きるために労働を通じて「目的論的」、「意識的」に自然に働きかけることで生産し、その欲求を満たさなくてはならない。この歴史貫通的な人間と自然の関係性が「物質代謝」という概念によって表現されているのである。

とはいえ、具体的な人間と自然の物質代謝は、その媒介である労働がどのようにして社会的に組織されるかに応じて大きく異なってくる。『経済学批判要綱』のなかでマルクスが指摘しているのは、資本主義社会における人間と自然の不断の物質代謝が歴史的に特殊な「分離」によって特徴づけられているという事態である(MEGA II/1: 393)。まさに『資本論』は資本主義における人間と自然の「分離」から生じる事態を様々な角度から分析しているのである。

『資本論』第一巻第五章によれば、資本主義的生産において、歴史貫通的な「労働過程」が「価値増殖過程」という資本主義に特有の形態規定を受け取ることで、人間と自然の物質代謝という素材的な過程は大きな変容を被ることとなる。端的に言えば、使用価値の生産が直接的な目的であった前資本主義社会に対し、資本主義的生産においては価値の生産が一義的な目的になるのである。かつては伝統的・自然的制限の下で具体的な欲望を充足するために使用価値を生産していたのに対し、資本主義社会においては際限のない価値増殖が目的となり、抽象的人間的労働を最大限に対象化させるという観点から労働や自然が徹底的に再編成

されていく。その際には、労働過程における自然の働きはもちろん、具体的な有用労働の側面さえも捨棄されてしまう。なぜなら単なる「人間的労働一般の支出」としての抽象的人間的労働を対象化した価値を中心に人間と自然の物質代謝が媒介され、資本の価値増殖に最適な形で変容されることになるからである。このような剰余価値の獲得に向けた盲目的な素材的世界の変容が掠奪的な性格のもので、物質代謝において様々な攪乱を引き起こす危険性を『資本論』は繰り返し指摘している。「この同じ盲目的な掠奪欲が、一方の場合に土地を疲弊させ、他方の場合には国民の生命力の根源をすでに襲っていた」(MEGA II/6: 245)。この引用からもわかるように、マルクスは「掠奪」の問題を生産の二大要素である「労働力」の消耗と「自然力」の枯渇として問題視したのである。

よく知られているように、『資本論』における「掠奪」という問題についての具体的な分析を可能にしたのが、リービッヒの『農芸化学』であった(Foster[2000]: 155)。リービッヒは利潤の獲得を目的とし、土壌の養分を農作物に可能な限り吸い尽させながらも、土壌に養分を補充しない資本主義的農業経営を「掠奪農業」とであると批判し、そのような自然の濫用から生じる土地疲弊が近代社会の物質的基盤を脅かすことになると警鐘を鳴らしたのである。

リービッヒの議論に感銘を受けたマルクスは、『資本論』第一巻の有名な一節において、「近代農業の否定的側面」を明らかにしたという理由でリービッヒの「不朽の功績」を称えながら、次のように述べた。「資本主義的生産様式は、……人間と大地とのあいだの物質代謝を、すなわち、人間により食料および衣料の形態で消費された土地成分の土地への回帰を、したがって持続的な土地肥沃度の永久的自然条件を攪乱する。こうしてこの資本主義的生産様式は、都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神生活とを、同時に破壊する」(MEGA II/6: 476-477)。19世紀には土地疲弊が大きな社会問題となり、増大する都市の労働者人口によって消費される食料は下水として河川に流れ、糞尿はロンドンの街を異臭に包み込み、コレラが蔓延した。ここには、近代に特有の「農業と工業の対立」が顕在化している(ibid.)。マルクスはリービッヒの『農芸化学』を自らの物質代謝論へと取り込むことで、土地疲弊の問題を、資本主義的生産様式が人間と自然の物質代謝のうちに引き起こす矛盾として定式化したのである。

マルクスがリービッヒを高く評価したのは、『ドイツ・イ

デオロギー』において、すでに定式化していた「都市と農村の対立」(DI: 49)という資本主義社会における社会的分業の矛盾に、『農芸化学』が科学的基礎づけを与えたからである。マルクスはリービッヒと受容をきっかけに、資本主義が人間と自然の関係をいかに変容し、攪乱するかをより詳細に展開する必要があると感じるようになっていった^{※2}。つまり、マルクスの自然科学研究の理由の一つは、人間と自然の物質代謝における様々な「修復不可能な亀裂」の原因と影響についての科学的認識を獲得することであった。

歴史的にみれば、土地疲弊の問題はハーバー・ボッシュ法によってアンモニアの大量生産が可能となり、窒素肥料の生産量が飛躍的に増大することによって解決されたといえる。だが、化学肥料への過度の依存は土地を硬化させ、排水性や保水性を失わせるばかりでなく、害虫による被害を増大させることにもなる。また土壌に残った窒素が環境中に流出することで赤潮を引き起こしたり、硝酸態窒素が環境汚染の原因となったりと、別の環境問題が生じている。その意味で、物質代謝の「亀裂」は修繕されることがなく、せいぜい別の問題へと「移転」されているに過ぎない(Clark and York[2008])。同様の物質代謝の「亀裂」と「移転」をめぐる問題は、化石燃料やレアメタルといった採掘産業にも当てはまるだろう。価値が人間と自然の物質代謝を十分に考慮することが出来ない以上、持続可能な生産の実現は常に大きな困難に直面する。その限りで、マルクスの価値論と物質代謝論の融合は、資本主義という「掠奪システム」(MEGA II/4.3: 239)を批判するための方法論的な基礎を依然として提供してくれるのである。

IV

エンゲルスと『資本論』

晩年の自然科学研究にもかかわらず、マルクスは『資本論』を完成することなくこの世を去った。そして、『資本論』第二部・第三部の編集ならびに、遺稿の整理はエンゲルスに託されることになる。その際に、マルクスの晩年の自然科学研究が軽視されたことはすでに見たが、実は、この背景にはマルクスとエンゲルスの「物質代謝」をめぐる微妙な意見の違いがあるのであり、この問題は『資本論』の編集にも反映されることとなる。

もちろん、エンゲルスも、リービッヒの掠奪農業批判の意義を認識していた。例えば、『住宅問題』(1872年)

では、リービッヒに言及しながら、「都市と農村の対立」の矛盾を指摘している(MEGA I/24: 74)。そして、『共産党宣言』で「農業経営と工業経営の結合」を求めたように(MEW 4: 481)、「工業生産と農業生産の緊密な結びつき」の再建を要求したのだった(MEGA I/24: 74-75)。

『資本論』第三部の編集に際しても、エンゲルスはマルクスの掠奪農業に関する文章をより具体的な例で補っている。例えば、「例えばロンドンでは450万人の肥料があるのに、資本主義的経済は巨額の費用をかけてテムズ河を汚染するのに使うよりましなことはできない」というリービッヒを意識した文章を付け足したのはエンゲルスである(MEW 25: 110)。ここには、フォスターが指摘するようなマルクスとエンゲルスの知的協業を見て取ることができる。

ところが、「物質代謝」となると事態はやや違った様相を見せる。エンゲルスは、マルクスが自然資源の枯渇の問題を「物質代謝」というリービッヒの概念を用いて分析していることに注意を払っていたが、関連する文章を敢えて変更しているのである。草稿では、マルクスは次のように述べている。「こうして大土地所有は、社会的な物質代謝と自然的な、土地の自然諸法則に規定された物質代謝の連関のなかに修復不可能な亀裂を生じさせる諸条件を生み出すのであり、その結果、地力が浪費され、この浪費は商業を通じて自国の国境を越えて遠くまで広められる(リービッヒ)。」(MEGA II/4.2: 752-53)ここで、マルクスはリービッヒに言及しながら、「社会的な物質代謝」(資本主義的な生産・流通・消費活動)と「自然的な物質代謝」の「連関」に、世界規模で深刻な攪乱が生じる危険性を指摘している。ここでは、資本主義の経済的形態規定と素材の世界における自然の諸制約のあいだに存在する緊張関係がはっきりと表現されていることがわかるだろう。

それに対して、エンゲルスは前半部分を次のように変更した。「こうして大土地所有は、社会的な、生命の自然諸法則に規定された物質代謝の連関のなかに修復不可能な亀裂を生じさせる諸条件を生み出す」(MEW 25: 821)。変更後の文章では、「自然的な物質代謝」が削除され、「土地」が「生命」に変更されたことで、「社会的な物質代謝」と「自然的な物質代謝」の対比と連関が不明瞭になっている。エンゲルス版においては、文法が破綻している場合や文意が不明瞭な場合に手が加えられていることは珍しくない。だが、ここはマルクスの草稿でも十分意味が明確であるだけでなく、物質代謝論の視座が明示された重要な箇所である。エンゲル

スによる変更ははたして何を意味しているのだろうか？

この問題を考えるためには、エンゲルスの「自然の弁証法」を考慮する必要がある。エンゲルスによれば、『反デュリング論』は自然と歴史を貫徹する法則を觀念論の「神秘的な形態の殻からとりだし、まったく単純で普遍妥当なものとしてはっきり意識させること」を目指したという。その際には、ヘーゲルが思考のなかで「弁証法的法則を構成して、自然のなかにもちこ」んだ誤りを避けて、「この法則を自然のうちに見つけたし、自然から展開する」ことが唯物論的な把握であるとされている(MEGA I/27: 475)。

このような記述から視えるエンゲルスの自然科学研究の狙いとは、自然のうちに弁証法的に存在する運動をそのままの形で「法則」として把握することである。エンゲルスのプロジェクトは、自然現象を単に弁証法的な思考方法を用いて認識論的に説明するのではなく、自然の運動や進化といった運動そのものを弁証法的に展開するという意味で、自然についての「存在論的な」考察である(Jordan[1967]: 167)。

さらに注意すべきは、このような把握が、外的自然の「支配」による「自由」の実現という実践的要請に結びついているということである。エンゲルスにとって、自由な社会としての社会主義の設立は、「自然の意識的な、本当の主人」になることを意味するのだ。

「これまで歴史を支配してきた客観的な諸力は、人間自身の統制に服する。このときから初めて、人間は、十分に意識して自分の歴史を自分で作るようになる。このときから初めて、人間が作用させる社会的諸原因は、おおむね人間が望んだとおりの結果をもたらすようになり、また時とともにますますそうになっていく。これは、必然の国から自由の国への人類の飛躍である。」(MEGA I/27: 446)

エンゲルスによれば、人間の意識と行為から独立した物象の支配を廃棄することだけでなく、自然において作用する諸力の法則性を認識することによって、自然を人間の意識的な制御のもとにおくことが、「自由の国」への跳躍になるのである。

もちろん、エンゲルスは自然法則を認識することで、完全に恣意的な自然の操作が可能になると考えていたわけではない。自然諸法則を十分に尊重しなければ、自然は「復讐」するとエンゲルスは警告する。「しかし、われわれ人間が自然に対して勝ち得た勝利にあまり得意になりすぎないようにしよう。そうした勝利のたびごとに、自然はわれわれに復讐するのである。」(MEGA I/26:

96)エンゲルスは自然の限界を認め、人間による自然に対する恣意的な振る舞い——とりわけ、目先の利潤の獲得を目指した資本主義的生産——を批判的に見ていた。自然の諸法則を無視するなら自然の支配は失敗し、労働の結果は当初の意図とは「正反対のもの」に転化してしまう。人間は活動的に労働する主体であることをやめ、自然の諸法則の貫徹による「復讐」を前に、受動的に振る舞うしかなくなるのである。

エンゲルスのエコロジー批判は「自然の復讐」という形で展開されており、それは目先の利害を追求する態度に向けられている。先ほどの『資本論』第三部における「亀裂」についての文章も、エンゲルスによって「自然の復讐」のシェーマに近づけられているのがわかるだろう。というのも、現行版では、生命活動を規定する自然法則の侵犯が、人間の文明生活にとって取返しのつかない事態を生むという意味が強調されるようになっていくからだ。だが他方で、資本主義的生産における「社会的な物質代謝」が「自然的な物質代謝」にかなる変容をもたらし、人間と自然の物質代謝にどのような「修復不可能な亀裂」を引き起こすかを分析するというマルクスの物質代謝論の問題構成が後面に退き、見えにくくなっている。エンゲルスはリービッヒの物質代謝論をもとに展開された経済的形態規定と素材的世界の連関についての文章を読者にとって理解しにくいものだと判断し、より「わかりやすい」「自然の復讐」という枠組みに近づけるような修正を加えているのである。

ここでの変更の理由に着目することで見えてくるのは、エンゲルスが、マルクスとは異なり、リービッヒの「物質代謝」概念を評価していなかったという事実である。エンゲルスはリービッヒの「物質代謝」概念をリービッヒが生物学の「素人」であると批判する文脈で参照しているのだ。

生命の起源について、リービッヒは生命体の歴史的発生の可能性を否定し、地球上の生命の起源として、宇宙空間から有機的生命が「輸入されてきた」という「永久生命」の仮説を採用した。それに対して、エンゲルスによれば、生命とは非生命体から歴史的に進化・発生した物質代謝の過程であり、そのことを示しているのが「蛋白体」である。「生命とは、蛋白体の存在様式であって、その本質的に重要な契機はその周囲の外的自然との不断の物質代謝である」(MEGA I/26: 40)。「蛋白体」という歴史的に形成された物質が織りなす同化と排出の化学的な過程のうちに、エンゲルスは生命の起源を見出し、蛋白体を実験室で製造することで、生命活

動を示す物質を人工的に作り出せる可能性を指摘したのである。

リービッヒは1840年代に生命に固有の栄養摂取、消化、排泄の過程を「物質代謝」として把握し、生命活動を化学的な過程として説明しようとした。そうした見解を引き継ぎながらも、エンゲルスは化学と生物学を分離し、生命に説明不可能な固有の原理を認めるリービッヒの「生氣論」を退ける。エンゲルスの考えでは、無生物においても化学反応としての外界との物質代謝が行われており、そこからさらに「蛋白体」が歴史的な過程を経て形成されると、生命としての物質代謝が誕生するというのである。

ここで重要なのは、蛋白体という「歴史性を持つ物質」の生成という視点がエンゲルスの「物質代謝」概念に独自性を付与する一方で(吉田[1979]: 204)、リービッヒの「物質代謝」概念は批判され、環境問題にも適応されることはなかったという点である。その結果、マルクスの「物質代謝」概念が持っていた、人間と自然の関わり合いを超歴史的・歴史的両側面から分析し、資本主義における人間と自然の関係の特殊性ならびにその矛盾を明らかにするという機能は失われてしまう。むしろ、「物質代謝」が扱う対象は自然の中で人間の関わり合いとは関係なしに生じた生命の起源・進化のプロセスに限定されるのである。エンゲルスにとって、「否定の否定」という弁証法の原動力は、「動植物界でも、地質学でも、数学でも、歴史でも、哲学でも効力をもっている法則」であった(MEGA I/27: 336)。『自然の弁証法』の主要テーマはエコロジーではなく、あくまでもこの法則が自然全体に貫徹していることの証明なのであり、「物質代謝」概念もそのための役割を担っているにすぎない。

こうして、リービッヒの見解を部分的に取り入れながらも、エンゲルスはマルクスがリービッヒの掠奪農業批判を通じて展開した「人間と大地の物質代謝の攪乱」という概念を採用せずに、『ドイツ・イデオロギー』の「都市と農村の対立」という枠組みに満足し続けた。だがその代償として、マルクスの理論的跳躍が「社会的な物質代謝」と「自然的な物質代謝」の「連関」の分析にこそ記録されているということにエンゲルスは気がつくことができなかった。つまり、エンゲルスは人間と自然のあいだで行われる「物質代謝」が資本による労働の形式的・実質的包摂を媒介として、どのように変容、そして再編成されるかという1850年代以降のマルクスの経済学批判の根幹部を捉えきれなかったのである。

なるほど「都市と農村の対立」という矛盾は、「中心」

と「周辺」の対立として解釈することで、現代の「環境帝国主義」分析にも応用可能であり、資本主義のエコロジー的批判に一役買っている(Clark and Foster[2009])。だが、そのことを理由に、マルクスが労働する個人を基礎に据えた社会把握に基づいて、「人間と自然の物質代謝」の「攪乱」という問題を『資本論』で展開するようになったことの意義を過小評価すべきではない。

マルクスは、いかなる社会においても人間は労働しなくてはならないという認識から出発し、そのうえで、資本主義的生産様式における歴史的に特殊な労働のあり方を分析することで、主客の転倒した社会における疎外がなぜ、どのようにして生じるかを明らかにしようとした。それゆえ、エコロジー危機を「資本主義の利得を追求した大量生産が悪い」と批判したり、「人間と自然の共存の必要性」を道徳的に訴えたりするだけでは不十分である。マルクスによれば、エコロジー問題は、根源的な生産条件である自然からの人間の「分離」から説明されなくてはならず、物象化に基づく資本の論理の社会的諸関係への浸透がいかにわれわれの思考・行動様式を根本から変容し、人間と自然の物質代謝を攪乱してしまうかを解明しなくてはならない。

こうして、都市と農村の「対立」や「統一」だけでは静的で抽象的であった見方が、「物質代謝」概念を中心に据えることで、『資本論』においては、生産過程や資本蓄積との関連でより動的に分析されると同時に、持続可能な生産のためには、労働のラディカルな変革(「私的労働」と「賃労働」の止揚)が遂行されなければならないということが明確化される。それに対して、1840年代の立場にとどまったエンゲルスには経済学批判とエコロジーを結びつける「人間と自然の物質代謝」という視点が欠けており、「自然の復讐」という静的な分析にとどまったといえる。節を改めてみるように、こうした把握の違いは両者の将来社会像にも反映されることになる。

V

「支配」と「復讐」の弁証法

マルクスやエンゲルスは労働による意識的かつ目的論的な自然法則の制御を人間に特有な活動としてみなしており、それを人間による自然の「支配」として表現した。「自由とは、自然的必然性の認識にもとづいて、われわれ自身ならびに外的自然を支配することである」

(MEGA I/27: 312)。ところがこうした発言は、「プロメテウス主義」の証拠として批判されてきた。

その際に、反証として引用されるのが、不完全な自然法則の認識は、むしろ正反対の結果を生み、自然の「復讐」を誘発するというエンゲルスの警告である。自然の復讐を避けるためには、「自然の諸法則を認識し、これを正しく適用できる」ことが重要だとエンゲルスは考える。この自然法則の意識的な適用こそが、「自由の国」の実現と密接につながっているのであった。ところが、自然の法則を無視し続ければ、いつかは自然に復讐されるという論理展開は「静的」であり、「左派の終末論」に陥っているという新たな批判を呼んでいる(Moore[2015]: 80; Smith[2008]: 247)。

それに対して、マルクスにとって、資本主義的生産による物質代謝の攪乱は、単なる自然の「復讐」ではない。というのも、『資本論』はさらに二つの観点から問題を展開しているからだ。第一に、資本はそうした自然の制限を受け入れはしない。第二部草稿で述べられているように、「資本が価値形成者および生産物形成者として作用する範囲は、弾力的であり、可変的である」(MEGA II/11: 345)。このような「資本の弾力性」とは、資本蓄積の困難に直面したのちに、さらなる技術発展や新しい使用価値の発見を通じて、「有用性の全般的な体系」(MEGA II/1: 322)を作り出し、危機を乗り越えようとする資本のポテンツに他ならない。しかし、価値の次元は抽象的人間的労働以外の素材的次元を十分に考慮することができない以上、そうした自然的制限を乗り越えようとする資本の試みは、矛盾を解消するどころか、素材的世界にさらなる軋轢を引き起こしてしまう。この資本と自然の間で繰り広げられる動的な関係の分析こそが、晩年のマルクスの研究テーマであった。エンゲルスは自然における超歴史的な諸法則を「科学」として展開しようとしたのに対して、マルクスの研究対象は、地質学、農芸化学、鉱物学の研究を通じて、より経験的な内容を扱うようになっていく。人間が自然を変容し、自然もまた人間を変容させるという相互規定的な歴史過程を物質代謝概念に基づいて把握し、資本の驚くべき弾力性を研究しようとしたのである。

第二に、物質代謝の攪乱についてのマルクスの論述は、自然の「復讐」という「終末論」的なトーンを弱め、むしろ、抵抗の契機として、より能動的な要因を強調している。剰余価値の生産を求める労働日の際限なき延長や生産過程の変革が労働を疎遠な活動にし、肉体的・精神的疾患を生み出したが、そのことが労働者た

ちの主體的な闘争を呼び起こし、物象の力に対する意識的な制御としての標準労働日の制定や公立の職業訓練学校の設立につながったのだった。同様の展望は、自然についても当てはまるだろう。事実、資本の論理による再編によって引き起こされる自然的な物質代謝の攪乱が、生産活動に対するより意識的な社会的管理の必要性を労働する諸個人に認識させるということを『資本論』は強調している。「[資本主義的生産様式]は、あの物質代謝の単に自然発生的に生じた諸状態を破壊することを通じて、その物質代謝を、社会的生産の規制的法則として、また完全な人間の発展に適合した形態において、体系的に再建することを強制する」(MEGA II/6: 476)。資本主義的生産は物質代謝の次元を十分に考慮することができないために、自然を破壊し、人間の生存までも脅かす。資本にとっては、価値増殖という目的がなんらかの形で実現されればいいのだから、地球の大半が人間や動物の生存に適さなくなろうとも関係がない。それゆえ、「自然の復讐」による資本主義の崩壊を待っているわけにはいかず、むしろ、こうしたエコロジー危機に直面した労働する諸個人が自然との物質代謝の意識的・能動的な制御にいたることが、未来社会の実現にとって不可欠なのである。

マルクスは『資本論』第三部草稿において、人間と自然の物質代謝の意識的な制御と自由の実現の連関について次のように述べている。「社会化した人間、アソシエイトした生産者たちが、盲目的な力としての自分たちと自然との物質代謝によって制御されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し、自分たちの共同的制御のもとに置くということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間本性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行なうということ」は「やはりまだ必然性の国である。この国のかなたで、自己目的として認められる人間の力の発展が、真の自由の国が、始まるのであるが、しかし、それはただその土台としてのあの必然性の国の上にのみ花を開くことができるのである。」(MEGA II/4.2: 838)

先にみたように、エンゲルスは自然の諸法則を認識、適用する必要性を説き、法則の認識を通じた自然の支配を「自由の国」とみなしたのであった。だが、ここでのマルクスの力点は異なっている^{※3)}。マルクスは、際限なき資本の価値増殖による物質代謝の攪乱に直面した生産者たちが問題解決のためにアソシエイトし、自然の「盲目的な力」を意識的な管理のもとにおくことを、持続可能な生産にとっての必要条件としてみなしていた。

自然との物質代謝の意識的な管理なしには、人類そのものの生存が脅かされるからである。しかし、そのような意識的な制御によって実現されるのは「やはりまだ必然性の国である」。アソシエーションにもとづく新しい社会は自由な個性の発展を実現するとされるが、それは労働の自由を超えたところにある。労働は生存に必要不可欠であるが、それは人間の活動の一契機にすぎない。「マルクスは資本主義のもとで発展した生産力を基礎として労働の自由を実現するならば、拡大された自由時間において労働の自由を超えた、真の自由が可能になると考えた」のである(佐々木[2012]: 185)。

マルクスにとって「自由」とは、自然科学の発展に基づく自然との物質代謝の意識的な制御に制限されたものではなく、芸術や音楽などの創作活動に従事し、友情や愛情を育み、読書やスポーツなどの趣味に興じることが含まれる。それに対して、自然の弁証法にこだわったエンゲルスは、超歴史的な自然そのものにおける諸法則の認識に基づく人間の自由な振る舞いを重視することになり、自然の「支配」こそが「自由の国」の実現であると考えた。こうした見方が「自由の国」の内容を狭隘にし、マルクスによって強調される将来社会における「個性」の全面的な発展という契機がエンゲルスの将来社会像においては弱められ、むしろ、「必然性に従うことで実現される自由」というヘーゲル的な自由観が前面に押し出されることになったのである。

VI

抜粋ノートと経済学批判

マルクスの物質代謝論が重要なもう一つの理由は、1868年以降の自然科学抜粋への「導きの糸」を提供してくれるからである。『資本論』の未完成部分を想像するための手がかりはこれらの抜粋ノートのうちに眠ったままなのである。

これまで、晩年の自然科学抜粋は「地代論」を完成させるための準備作業であると考えられがちであったが(竹永[2016])、マルクスの抜粋ノートを実際に検討してみればすぐにわかるように、マルクスの問題関心は、「地代論」の枠組みを大きく超えるものである。先に見たように、マルクスのリービッヒ受容もまた、地代論に限定される内容を持つものではなく、資本主義的生産における人間と自然の関わり合いの再編成とその矛盾を問題視するものである。端的に言えば、マルクスの自然

科学研究の目的の一つは、資本の論理に従った人間と自然の物質代謝の変容から素材的世界における軌轢がいかに生じてくるかを把握することであった。

ここで重要なのが、ドイツの農学者カール・フラスからの抜粋である。マルクスは「無意識的な社会主義的傾向」をフラスの作品のなかに見出し、詳細な抜粋を作成した(MEW 31: 53)。マルクスの高いフラス評価に促されてエンゲルスもまた『時間における気候と植物界』というメソポタミア、エジプト、ギリシャなどの古代文明における森林伐採を原因とした気候変動の問題を扱う著作に取り組み、抜粋ノートを作成した。1879/80年に作成されたエンゲルスのフラス抜粋は、すでに『時間における気候と植物界』を『自然の弁証法』で使用した後に作成された簡潔なものであるが、その分、エンゲルス自身の言葉によって要約された文章は、その着眼点、マルクスによって影響されていることをはっきりと記録している。つまり、両者の自然科学をめぐる知的関係は1864年の頃と逆転しているのである。

第一に、「耕作は、——もしそれが自然発生的に前進していった意識的に支配されないならば……——荒廃を後に残す」(MEW 31: 53)というフラスの洞察をマルクスは1868年3月25日付のエンゲルス宛の手紙で高く評価しているが、まったく同じ見解がエンゲルスのノートにも見いだされる。「発展的な民族農耕は、甚大なる荒廃を後に残す」(MEGA IV/31: 515)。その直前の箇所ではエンゲルスは、「文明が、従来の形態においては土地を疲弊させ、森を荒廃させ、土地をその本来の生産物にとって不毛にし、気候を悪化させる敵対的な過程であることの主要な証明」とフラスの著作の意義をまとめ、ドイツやイタリアで森林伐採の結果「5~6度(列氏)気温が上昇したことを書き留めている(ibid.: 512)。この無意識的な生産が「荒廃」を後に残すという発想は『自然の弁証法』における「自然の復讐」へと反映されている。事実、該当箇所ではエンゲルスはフラスを参照しながら次のように述べたのだった。「メソポタミア、ギリシャ、小アジアその他の地域で、耕地を得るために森林を根こそぎ引き抜いてしまった人々は、その森林と一緒に水分が溜まり、貯えられる場所を奪い去ることによって、あの国々の今日の荒廃の土台を自分たちが築いていた、とは夢にも思わなかった。」(MEGA I/26: 96)フラスの影響がはっきりと記録されているのがわかるだろう。

第二に、同じ手紙のなかでマルクスはフラスを「ダーウィン以前のダーウィン主義者」と呼んだが(MEW 32: 52)、『自然の弁証法』を準備していたエンゲルスも

「自然選択」の競争を連想させる一文をフラスから抜粋している。「すでに述べたように、同時にオークは先に挙げられた自然的気候の諸要素(温度&湿度)に極めて敏感であり、そうした要素にわずかながらでも変化が生じる場合には、共に躍起になっている、より耐性があり、敏感でない森林景観に対して自然的生長と自己保存の競争において遅れをとる」(MEGA IV/31: 515)。エンゲルスの狙いは歴史上の気候変動に合わせた植物種の変化についてのフラスのダーウィン主義的な説明をもとに「植物種の恒常性についての信仰」を退けることにあった(ibid.: 512)。もちろん、エンゲルスは、それがマルクスと共有された問題意識だと考えたに違いない。

ところが、マルクス自身のフラスへの関心は、「自然の復讐」や「ダーウィン主義」にとどまらなかった。マルクスは1868年にフラスからの著作を抜粋すると並行して、ドイツの歴史法学者ゲオルク・ルートヴィヒ・フォン・マウラー著『マルク・ホーフ・村落・都市制度および公権力の歴史序説』というゲルマン民族の土地所有制度についての著作からも詳細な抜粋を作成し、同じ手紙の中で、マウラーの理論にも「社会主義的傾向」を見出している(MEW 32: 51)。一見無関係の自然科学とゲルマン共同体研究をマルクスはなぜ並行して研究したのであろうか。

実は、その答えがフラスの著作のなかに潜んでいる。1866年に刊行された『農業危機とその治療手段』という著作のなかで、フラスはマウラー『序説』から引用を行い、ゲルマン共同体における生産の持続可能性を高く評価しているのだ。

「もちろん村落マルクが木材、干し草、藁、あるいは堆肥さえも、それどころか家畜(豚!)でさえ、村落の構成員以外に売ることを許しておらず、マルク内で収穫された農作物やワインが、そこで消費されるよう命ずるならば(そのことから、様々な罰令権が生じた)、耕地の地力維持のための手段に事欠かないのみならず、森林や牧草地からの補助を利用することによって、あるいはさらに河川によって栄養分を与えられた草地を利用することによって、いたるところで地力の増大が起きたに違いなかった。(マウラー、前掲書、313頁以下。)(Fraas[1866]: 210)

フラスは、あらゆる前資本主義社会が無計画で、自然諸法則を無視した生産を行い、その後に荒野を残したと主張しているわけではない。むしろ、ゲルマン共同体においては、持続可能な生産のもとで地力の増大が実現されていたというのである。というのも、ギリシャ

やローマのような商品生産が一定程度存在し、共同体の紐帯が解体されつつある社会とは異なり、ゲルマン社会においては、土地利用に対する共同体の規制が働いており、それが持続可能な耕作を実現していたからである。マルクスはフラスを読んで、マウラーにも興味を持ち、前資本主義社会の人間と自然の物質代謝のあり方への関心を強めていく。

ここで重要なのは、自然法則を十分に認識していない前近代社会が自然の「復讐」を引き起こしたという見解とは正反対の、共同体的生産においては、人間と自然の物質代謝の持続可能性が、その「生命力」の源泉となっていたというマルクスの認識である(MEGA I/25: 223)。実際、ザスーリチ宛の手紙でマルクスはマウラーに言及しながら、アルカイックな共同体の生命力に依拠した農業共同体の残るロシアが資本に対する抵抗の拠点となり、西欧とは異なった社会主義革命への道を切り拓く可能性を認めている。その生命力とは、持続可能な自然との物質代謝を実現していた農村共同体の力に他ならない。つまり、資本主義とはまったく異なった人間と自然の物質代謝の管理の仕方が——それがたとえ伝統や慣習に基づく制度によるものであり、近代自然科学による自然法則の認識によって意識されていなくとも——より持続可能な生産を実現しており、その力が資本の力に対する抵抗の物質的基盤になりうる。そして、そのような生命力に着目したマウラーやフラスの著作には「無意識的」ながらも「社会主義的傾向」が存在するとマルクスは考えたのだった。ここにはマルクスのより実践的なフラスへの関心がある。

また1878年に作成されたジョン・イエーツやジョセフ・ジュークからの長大な地質学抜粋も物質代謝論との関連で興味深い。抜粋の内容は多岐に渡り、その意義をエコロジーに還元することはできないが、地質学がマルクスの経済学批判との関連性を持っていたことはノートからもはっきり見て取れる。例えば、マルクスは「膨大な貨幣額が、石炭採掘だけみても、それについての無知から無駄にされている」(MEGA IV/26: 478)という指摘を抜粋した後に、地質学の「大きな実践的重要性」として、「イギリス諸島における地質学の実践的充用の主要な点の一つとして、早まった事業に貨幣を無駄に支出することを防ぎ、成功のチャンスがあるところへ事業を方向づけることがある」という点を書き留めている(ibid.: 642)。さらには地質学の進歩が石炭や鉄などの原料や補助材料の発見・産出の方法を改善し、生産性向上に寄与することや、輸送手段の改善が農業や採取産業と工業の

関係にもたらす影響を抜粋している。

加えて、人間が自由に変容することができない自然的条件としての地層が社会の発展に及ぼす影響についてもマルクスは注意を払っている。「イングランドは土壤の形状や諸相、ならびに人々の境遇や雇用が互に一樣に対照的な、まったく似ていない二部分へと分けられる」。具体的には、北西部は「主に古生代の地層で、しばしば荒涼とし、不毛で、山が多いが、多くの場所では鉱物資源に富んでいる。他方で南東部は第二紀・第三紀の地層であり、一般的に柔らかく、輪郭は緩やかで、地面の下に資源はほとんどないか、まったくない。」こうして、前者では「採鉱と製造業に従事する人口」が多く、後者では「農業人口」が中心になっているという(MEGA IV/26: 641)。

『資本論』第一巻において、マルクスは、農業と工業の対立の彼岸にある「両者の新しいより高い総合」の実現を予見していた(MEGA II/6: 476)。だが、ジュークが指摘するような人間が変容することのできない地質学的特徴は「都市と農村の対立」の止揚を目指す際に、より一層慎重に再考されなければならない問題だろう。こうした箇所にもマルクスは欄外線や下線を引いて、その重要性を強調したのだった。

フラスやダーウィンとの関連で言えば、気温や降水量が土壤の形成にも大きな影響を及ぼし、植物相や動物相も規定するという点にジュークも触れている。とりわけ「古生物学」という節において、ジュークはダーウィンにも触れながら、長期的な地質変動とそれに連動する様々な地域における大きな気候の変化がしばしば生じていたに違いない」と述べ、「気候の変化は種の破壊を含んでいる」と述べた(MEGA IV/26: 229, 219)。そのような指摘に着目するなかで、マルクスが「種の絶滅は依然として進行している(人間自身がもっとも活動的な根絶者である)。」(ibid.: 233)というジュークの指摘を抜粋しているのは注目に値する。マルクスは気候変動の要因を長期にわたる地質学的な観点からも把握し、その上で、とりわけ人間が気候変動や動植物種の生存に与えるインパクトを研究しようとしていたのである。ここでも、ダーウィンへの関心は、「生命の誕生」、「自然選択」、「進化」といったエンゲルスの百科事典的な問題設定とは異なり、あくまでも人間と自然の物質代謝の具体的なあり方なのである。

VII

おわりに

最晩年まで続いた自然科学への取り組みにもかかわらず、マルクスは新たな知見を『資本論』に取り入れることができないままに力尽きてしまった。それでもマルクスとエンゲルスの自然科学研究の相違を見て取ることができる。

エンゲルスの力点は、自然科学によって自然そのものに存在する諸法則を百科事典的に認識することであり、それに基づいて「自由の国」を設立することにあった。マルクスの「唯物論的方法」は特定の社会的諸関係のもとでの主客の転倒・現象と本質の取り違えの必然性を明らかにするものであるが、エンゲルスの「唯物論」は、「意識」と「物質」の二元論のもとで、物質の存在論的優位を説く哲学的で、超歴史的な枠組みによって規定されている。そうした独自の問題設定のために、エンゲルスはリービッヒの「物質代謝」概念を拒否することとなり、1840年代の「都市と農村の対立」という把握で満足し続けた。

それに対して、『ドイツ・イデオロギー』以降のマルクスにとって、そのような哲学的な関心はもはや問題とならなかった。マルクスは「物質代謝」概念を発展させることで人間と自然の物理的かつ社会的な関わり合いの変化を歴史的、経済的、自然科学的見地から把握しようとした。とりわけ、近代の大工業のもとでの技術学の発展は、人間の合目的な自然への関わり合いを「特定の目的のための自然科学、力学、化学などの意識的適用」(MEGA II/4.1: 95)へと解体し、人間と自然の物質代謝をこれまでにないような規模で変容していく。1860年代以降自然科学や技術学を熱心に研究していたマルクスは、近代の自然科学の技術学的応用が「資本の生産力」として現れるために、自然との物質代謝の攪乱が生じてしまう危険性を察知し、資本主義が持続可能性をもたない社会システムであることを警告したのだった。

不幸なことに、こうした問題意識の違いのために、マルクスによる自然科学研究の重要性はエンゲルスやその後のマルクス主義者たちによっても認められず、抜粋ノートは現在にいたるまでその意義が認められないままに放置されてきた。だが、『資本論』第一巻の刊行から150年経った今、マルクスの思想の現代的な意義を問うとするなら、これまで軽視されてきた膨大な資料を吟味することが必要だろう。

- ❖1) マルクスとエンゲルスの著作からの引用は *Marx-Engels-Gesamtausgabe* (Berlin: De Gruyter, 1975-) ならびに *Marx-Engels Werke* (Berlin: Dietz Verlag, 1956-) から行い、MEGAとMEWと略記したうえで、本文中で巻数と頁数を併記する。「ドイツ・イデオロギー」に関しては、DIと表記し、*Marx-Engels-Jahrbuch 2003* (Berlin: Akademie Verlag, 2003) から行う。
- ❖2) この点については、岩佐・佐々木(編)[2016]所収のフォルグラーフ論文が極めて示唆的である。
- ❖3) この引用からマルクスとエンゲルスの将来社会像の同一性を唱える議論としてはスタンリーの著作(Stanley[2002]: 23)があるが⁵、説得力を欠く。

参考文献

- 佐々木隆治[2012]『私たちはなぜ働くのか』旬報社。
- 竹永進[2016]『『資本論』の草稿研究の日本における最近の動向』『経済研究』第29号(2016年3月)。
- 吉田文和[1979]「リービヒのStoffwechsel論」『経済学研究』第29巻第1号(1979年3月)。
- 岩佐茂・佐々木隆治(編)[2016]『マルクスとエコロジー』堀之内出版。
- Angus, I.[2016], *Facing the Anthropocene*, Monthly Review Press.
- Burkett, P.[1999], *Marx and Nature: A Red and Green Perspective*, St. Martin's Press.
- Carver, T.[1983], *Marx & Engels. The Intellectual Relationship*, Wheat-sheaf Books.
- Clark, B. and J. B. Foster[2009], "Ecological Imperialism and the Global Metabolic Rift," *International Journal of Comparative Sociology* vol. 50, no. 3-4 (June/August 2009).
- Clark, B. and R. York[2008], "Rifts and Shifts," *Monthly Review*, vol. 60, issue 6 (November 2008).
- Foster, J. B.[2000], *Marx's Ecology: Materialism and Nature*, Monthly Review Press.
- Foster, J. B. and P. Burkett[2016], *Marx and the Earth: Anti-Critique*, Brill.
- Foster, J. B. et al.[2011], *The Ecological Rift*, Monthly Review Press.
- Fraas, C.[1866], *Ackerbaukrisen und ihre Heilmittel*, Brockhaus.
- Jordan, Z. A.[1967], *The Evolution of Dialectical Materialism*, Macmillan.
- Klein, N.[2014], *This Changes Everything: Capitalism vs. the Climate*, Simon & Schuster.
- Longo, S. B. et al.[2015], *The Tragedy of the Commodity*, Rutgers University Press.
- Moore, J. W.[2015], *Capitalism in the Web of Life*, Verso.
- Saito, K.[2016], *Natur gegen Kapital*, Campus.
- Smith, N.[2008], *Uneven Development*, The University of Georgia Press.
- Stanley, J. L.[2002], *Mainlining Marx*, Transaction Publishers.
- Tanuro, D.[2010], "Marxism, Energy, and Ecology," *Capitalism, Nature, Socialism*, vol. 21, no. 4.
- Žižek, S.[2009], "Ecology," in A. Taylor(ed.), *Examined Life*, The New Press.